

清末小説から 110

2013.7.1

いくたびかの阿英目録 2 樽本照雄 1

L. J. Beeston の中国語訳..... 渡辺浩司 8

江贵恩的《时新小说》和《鬼怨》 傅兰雅“时新小说”征文参赛作者考(六) 姚 达兑 18

清末小説から24

『清末民初小説目録 第5』は無料公開中です。清末小説研究会 <http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto> をご覧ください。私的利用の範囲内で転載、複製することは自由です。お役に立てばさいわ

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録 2

樽 本 照 雄

汪家熔のばあい

私の知っている身近な例をあげよう。資料隠しという点では、今も同様のことをする研究者がいる。

『繡像小説』の編集者が李伯元であったかどうかの討論が行なわれた。

該誌の主編は李伯元だというのが昔からの通説だ。陶報癖、阿英を含めて多く

の文献がそう書いている。

そうではない、と李伯元編者説を全面的に否定したのは、当時商務印書館に勤務していた汪家熔だった。

『繡像小説』の版元は商務印書館だ。内部関係者から疑問の声があがった。状況証拠ばかりで、直接の物的証拠がない。これが汪家熔の論拠だ。李伯元でなければ、誰か。彼は、夏曾佑の名前をあげた。

1984年に樽本が、中国の新聞に短文を書いて反論する。なんと、今からほぼ30年前のことではないか。

私が反論の根拠としたのは、李伯元「文明小史」と「老残遊記」の盗用問題である。李伯元が主編だからこそ、『繡像小説』誌上に連載されていた劉鉄雲「老残遊記」原稿からの盗用事件が発生した。この事実を見れば、汪家熔説は成立しない。これが私の主張だ。

私は、汪家熔を名指しした。研究論文

への批判だから当たり前のことだ。私の短文は中国の全国紙に掲載されたから、学界にあたえた衝撃が大きかったと思われる。同時に魏紹昌は、夏曾佑説を批判する。汪家熔は、こちらはすぐに取り下げた。それ以来、彼は、ただただ李伯元ではない、と言いつづける。長期にわたって討論が継続された。大きな注目を集めたということができるだろう。

論争が発生して17年後の2001年、劉徳隆が資料を発掘した。当時の新聞広告に「商務印書館 / 南亭亭長 / 繡像小説」と掲載されている、と。南亭亭長は、李伯元にほかならない。

私は上海図書館におもむいた。自分の目で確認するためだ。また、それができる環境が中国に出現している。複数の新聞(縮小写真)と、異なる日付の広告(同一内容)によって、私はそれを確かめたのだ。広告主は、雑誌の発行元である商務印書館にほかならない。決定的な資料である。中国語では「鉄証」という。これで論争は収束した、と誰もが考えた*¹¹。

ところが、汪家熔だけは、いまだに自説を訂正しない。それどころか、証拠資料そのものを認めない。存在しないかのように無視するのだ。

1907年10月9日付『時報』『中外日報』には、「商務印書館 / 南亭亭長 / 繡像小説」という商務印書館自身が出稿した広告があるではないか。重ねていう。南亭亭長は、李伯元の筆名だ。写真をそえて公表した。指摘して複数回になった。

汪家熔は、最初は反論を試みた。だが、失敗した。そのあげく、ついには黙殺す

ることにしたらしい。彼が無視するから、私は今ここでも取り上げている。出版関係の史料を網羅する勢いで編集刊行している『中国出版史料・近代部分』補巻にも、該広告を収録しない。自説を否定する資料には知らん顔をする。重要な資料であろうと、自説を否定するものは掲載しない。採録する考えが、汪家熔にはないのだ。

どうやら、汪家熔は結論を先に決めたと見える。李伯元は『繡像小説』を編集しなかった。いったん決定された結論は、どのような資料がでてこようが、影響を受けない。結論とは関係がないのだ。

『繡像小説』の主編は李伯元ではない、をくりかえすだけ。言いつづければ、虚偽も真実になると信じている態度だ。これは、すでに研究ではない。

その偏向して硬直した姿勢を目の当たりにするにつけ、昔、にたようなことがあったことを思い出す(林訳『吟辺燕語』で後述)。

自分の立論に不都合な資料は、無視すれば消滅する、と汪家熔は考えているのだ。現在は、もうそういう時代ではなくなっている。世界中の研究者が、ウェブを通して見ているというのに。

さて、阿英目録だ。当時といわずこのあいだまで、多くの研究者が全面的に信頼し依拠した研究基礎資料のひとつであった。間違いはない。そういう意味では、利用者の多数を強引に服従させるほどの収録数を誇った最強の存在なのである。

阿英は雑誌と翻訳を重視する

阿英目録のもうひとつの特色は、書籍雑誌を実物で所蔵していたことだ。この点は、強調したい。

阿英は、原物をもとにして目録を編纂した。今でもほとんど信じられないくらいだ。大規模な個人蔵書が、現在は失われているにしても*¹²、過去には阿英の手元にたしかに存在した。この事実を否定することはできない。それが持つ意味は大きい。

研究者の多くが、長年にわたり阿英目録に全幅の信頼をよせた理由は、まさにこの点にある。

さらに、阿英目録は、単行本を主にし、雑誌にも目配りをした。雑誌を作品採取の範囲内に含めたことにより、阿英が学術的先見性を備えていたことが証明される。私はそう思う。

阿英が言及したいいくつかの先行目録は、従来通りに単行本を中心に編纂されていた。雑誌にまで注意が及んでいるのは少ない。当たり前といえば、そうなのだ。雑誌という形態そのものがそれまではなかったのだから。

清末になって登場した活版印刷物は、具体的には新聞雑誌となって読者の手元にとどいた。それに加えて、活字印刷の単行本も刊行された。しかし、阿英に先行する小説目録は、雑誌にはほとんど目もくれない。最初から、採録の対象にはしなかった。

阿英はそれらとは違った。彼は、雑誌という媒体があらたに出現したことを熟知していた。阿英『晚清文藝報刊述略』(1958)を示せば理解できる。文藝小説

雑誌をまとめて説明している。雑誌こそが、清末とそれ以前とを区別する重要な変化だ。彼は敏感に反応した。当時の中国にはそれまでにはなかった出版の新しい流れである。

ここも重要だからくりかえしたい。雑誌を採録の対象に含めているのが、大きな特徴だ。先行する類似目録は、収録しているにしてもずっと少ない。阿英目録の先進性がここにあらわれている。

翻訳についてもいわなくてはならない。創作と翻訳に分類するところに、翻訳を重視する姿勢が明確に示されている。

当たり前のことだと思われるだろう。だが、そうあるべき研究姿勢は、中国においてかならずしも一般に広く認識されていたわけではない。

思い出すのは、1990年代に私が著名な中国人研究者蕭相愷教授から聞かされたあることばだ。その人は、阿英目録の補遺を発表している。「《晚清小説目》補編」(1989)という。翻訳を重視している阿英目録の補遺である。研究の実状に詳しいはずだ。

中国で開催される国際学会へ参加するため列車に乗った。車中でのこと。清末翻訳研究はどうなっているか、と私は蕭相愷に質問した。翻訳研究にしぼったのは、日本では中国の内部状況がわからないからだ。彼ならば熟知しているだろう。

その答えは、単純明快だ。翻訳は中国文学ではない、という。

あまりにもきっぱりと断言されたので、私は返事する言葉を思いつかなかった。中国ではそういう風に考えているのか。



晚清小説大系 広告パンフレット

阿英目録の補遺を作るほどの研究者ですら、その程度の認識なのか。私の口からは、ハア、という音が出ただけ。阿英の学術的能力の高さは、中国の学界では認められていないとわかった。今でも忘れることができない。

のちに中国の近代翻訳小説研究が遅れている、あるいは不十分である原因にふれる中国人研究者の文章を読んだ。そこに指摘されていたのは、まさにあの、翻訳は中国文学ではない、という考え方の存在だ。本当のことだ。中国近現代文学研究家のなかには、意識の底にいまでも根強く残している人がいる*13。

そういう経験をした。だから、阿英目録の翻訳部分がますます重要に思える。涵芬樓目録の分類方法を継承し、周越然

目録をにらみながら、さらに広く収集している。

実現しなかった叢書の企画

研究者が阿英目録それ自体を重視する、というのはわかる。だが、そこに翻訳小説についての一般的無理解を組み合わせると、矛盾している。

ところが、この両者をひとつに具現した実例が出現する。これも1980年代のことだ。

1984年に台湾から清末小説の叢書が刊行された。

『晚清小説大系』全37冊(台湾・広雅出版有限公司1984.3)である。81種(うち翻訳は5種)の小説を復刻している。資料の来源は、主として阿英編の「中国近代

晚清文学雑誌五種影印版



1 小説林

●1907.10-1908.8(計12期)●A5 全1385頁 精装4冊
 ●1980年10-11月刊行予定●定価18,900円
 主編者は費人(李西), 上海で出版。小説の著訳を主とし小説についての論考、批評を併せるほか、雑劇、筆記を含む。最も主要なものは《孽海花》(21回至24回)。伝奇に《軒亭秋雜劇》(記秋理事)、雑著に《小説小話》(費西)、《余之小説観》(覺我)、《閩雜軒詩話》(費西)などがある。



2 新新小説

●1904.9-1907.4(計10期)●A5 全524頁 精装2冊
 ●1980年12月刊行予定●定価8,400円
 主編者は陳景韓(冷血), 上海で出版。小説を主とし、《中国興亡史》《菲風實外史》(侯民)、《刀余生伝》(冷血)、《新史現形記》(陸子)などがあるほか、翻訳にモーパッサンの《義勇軍》、《血無党奇話(ロシア)》(冷血)、雑録に《林陵春伝奇》(呉梅村)、詩話に《芳菲菲館詩話》がある。



3 綉像小説

●1903.5-1906.4(計72期)●A5 全3146頁 精装8冊
 ●1980年12月刊行予定●定価42,700円
 半月刊。線装本で上海商務印書館発行。主編者は李宝嘉(伯元)。小説の重要なものに《文明小史》、《活地獄》(李伯元)、《老残遊記》(劉勳)、《海女話》(葉慈余生)、《負暄閑話》(蘆田)、《諸編奇聞》(呉研人)、《泰西歴史演義》(洗紅命主)があり、翻訳作品に《山家奇遇》(マーク・トゥェン)、《天方夜話》、彈詞、原本に《醒世錄》、《経国英雄新義》がある。



4 月月小説

●1906.9-1908.8(計24期)●A5 全3010頁 精装6冊
 ●1981年4月刊行予定●定価38,500円
 上海群学社発行。《綉像小説》と《新小説》の停刊後、当時の文学雑誌の中心となる。小説《肉骨演説》、《免財秘訣》、《上海遊藝録》、《劫余伝》、伝奇《曾方四》、論文《月月小説序》、雑文《李伯元伝》など呉研人の作品を多く収載するほか、小説《玉環外史》(天俤生)、《後官場現形記》(白鳳)、翻訳《鉄窓紅涙記》(ユーゴ)、論文《中国歴史小説論》(天俤生)、《論中国之伝奇》(呉梅村)など多数。



5 新小説

●1902.11-1906.1(計24期)●A5 全2250頁 精装6冊
 ●1981年4月刊行予定●定価31,500円
 横濱で発行。実質的に梁啓超主編。近代的女学雑誌の嚆矢として、大きな影響力をもった。主要作品はつぎの通り。《二十年目睹之怪現狀》、《傷史》、《九命奇冤》(呉研人)、《新中国未来記》、《小説社会之關係》(梁啓超)、《黃綉球》(顧頡)、《論文学上小説之位置》(楚卿)、《論写情小説于新社会之關係》(松岑)、《論戲曲》(三愛)、《小説開演録》(冷血生)、《新英林伝記》(呉研人)。

■申込方法

添付の申込用紙により、最寄りの書店または直接小社にお申込みください。

■ローンのおすすめ

当店では個人でご購入される方々の便宜をお計りするため、1年～2年のローンも取り扱っております。お気軽にご相談ください。

晚清文学雑誌5種影印版 広告パンフレット

反侵略文学集」、『晚清文学叢鈔』また上海書店が影印、香港・商務印書館が出版した清末雑誌5種だ。それらを再編集して成った。

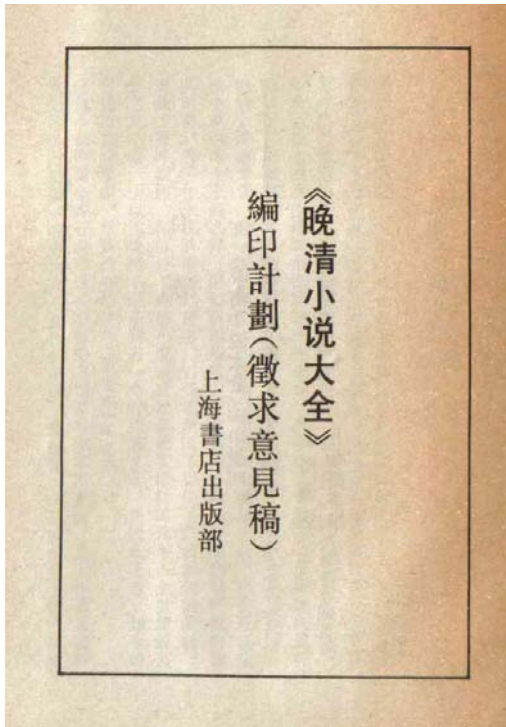
この種の叢書としては、当時としては世界で最大規模だ。阿英が編集した「中国近代反侵略文学集」「晚清文学叢鈔」よりも大きい。すぐれた企画といふべきだ。添付されたいくつかの解説文は、日本人研究者の論文を無断漢訳している*14。台湾、上海をとわず、そういう種類の行為があるのは昔からの習慣らしい。無断漢訳する側にしてみれば、頼まれもしないのに宣伝してやっている、という考えだそうだ。これは海賊版製作にもいくらか通底する。

台湾の叢書に対して競争心をむき出しにした書店がある。

上海書店は、影印叢書を企画した。1985年のこと。上海書店と上海図書館の所蔵本を主として使用し、各地にある蔵書で補充する。200種前後の小説を、各冊500頁、上製本60冊にまとめる。叢書の名称を「晚清小説大全」という。こちらは翻訳を含まない。

結局のところ、この企画は実現しなかった。別の姿、つまり『中国近代文学大系』に変更されたと思われる。

日の目を見ることのなかった大型叢書だ。ただ、準備段階で阿英目録が使用されたことがわかっている。作品選定をするばあいの参考資料という位置づけだ。



上海書店出版部『《晚清小説大全》編印計劃(徵求意見稿)』(上海書店、上海圖書館[1985.8])である。

内部資料のためか奥付は、ない。1985年8月付上海書店の説明文がある。かりにこれを刊行日付(以下、刊年と称する)としておく。

内容は、「晚清小説大全」の「編印説明」を前に置き、阿英「晚清小説目」の影印が主体である。ただし、「創作之部」のみ。「翻訳之部」は収録しない。後部に「晚清小説補目」を補充しているがこちらにも翻訳は見えない。「補目」に目をとおす。雑誌に掲載された作品で阿英目録に不採録のものが、補足の中心になっているようだ*15。

ここには、阿英目録の重視と翻訳軽視を一体化した実例が、明らかに存在する。

姿を変えたのちの『中国近代文学大系』全30冊(上海書店1990.10-1996.7)が、翻訳文学集3冊を含んでいるのはまことに喜ばしい。

ところが、もうひとつの大型叢書である「中国近代小説大系」全80冊(南昌・江西人民出版社1988.10-1989.12、南昌・百花洲文藝出版社1991.3-1996.12)は、あいかわらず翻訳を度外視している。これはどうだろう。

さて、阿英がいう「簡素な目録」とは、私のことばでのべるとすれば、1作品を1行で記述する、このことだ。

阿英が言及しなかったもうひとつの先行目録を紹介しながら、1作品1行記述の実際をみてみよう。 罫

【注】

11) 論争終結関係の樽本論文を紹介する。

「『繡像小説』編者問題の結末」『清末小説から』第62号2001.7.1、1-8頁。要約：『繡像小説』の主編は李伯元か否か。1984年以来続いてきた国際的な学術論争である。国際的というのは、中国国内にとどまらず、討論に参加したのが世界中の研究者だからだ。李伯元否定説は、状況証拠、新資料の発見にもかかわらず、提唱者の汪家燊自身が納得しないまま、現在に至っている。なぜ汪家燊が納得しないかといえば、商務印書館が李伯元を『繡像小説』の主編に招いた、と証言する資料が見つからないからである。汪家燊は、自ら勤務する商務印書館にその証拠を探しあてることができなかった。しかし、2001年、決定的な資料が劉徳隆により発掘された。1907年10月9日付『時報』『中外日報』には、「商務印書館/南亭亭長/繡像小説」という商務印書館自身の広告が掲載されているのだ。文中で南亭亭長李伯元を『繡像小説』の編集に招いた、と明言している。長年にわたる論争は、これでようやく終結したというこ

とができる。

「『繡像小説』問題」『清末小説から』第96号 2010.1.1、17-18頁。要約：汪家焄が『繡像小説』主編問題をまた蒸し返している。『中国出版通史』7清代卷(下)(北京・中国書籍出版社2008.12)において主編は李伯元ではないという自説を展開する。すでに問題を解決する資料が提出されているにもかかわらずだ。版元である商務印書館が新聞広告で李伯元を雑誌の主編に招いたと宣伝した。その動かない証拠を汪家焄は否定するのである。研究の基本をないがしろにしていると言わざるをえない。

「『繡像小説』問題はどうか論じられているか」『商務印書館研究文献目録』清末小説研究会2010.6.1 清末小説研究資料叢書13、38-55頁。要約：『繡像小説』については編者、発行遅延、盗用の問題が存在する。研究者は、それらの問題をどのあたりまで把握しているのか。李伯元研究から、張仕英と王学鈞の著作を取り上げて検討する。『繡像小説』研究からは、王燕と郭浩帆の論文をとりあげる。さらには、文迎霞、汪家焄の論文も視野に入れて評価一覧表を作成した。

「貴重な出版史料のひとつ 『繡像小説』主編を示す商務印書館の新聞広告」『清末小説』第34号2011.12.1、117-119頁。要約：『繡像小説』の主編は李伯元である。当時の新聞広告に発行元の商務印書館がそう書いている。この事実を汪家焄は、認めようとはしない。あいかわらず、主編が誰かは不明だ、と主張している。彼が編集する『中国出版史料・近代部分』補巻下冊477頁にも間違っただことを注釈に書いた。それが間違いであり、該書に収録すべき新聞広告であることを指摘する。商務印書館の広告影印を添付する。

- 12) 阿英の出身地である安徽省蕪湖に阿英蔵書が置かれていると聞いたことがある。そこを訪問した研究者の話では、図書はあるが管理人が少ない、対応できないから見せながらない、という。ウェブで調べると、1987年に「安徽第一名人蔵館」が設立され、阿英蔵書資料陳列室がある。そこに阿英蔵書があるのかどうか、詳細はわからない。見ることができなければ、ないのと同じだ。

- 13) 「翻訳は中国文学ではない」は、ずっと以前に紹介したことがある。そのことば通りの文章を2013年に読むことになるとは、思いもしなかった。以下の論文である。梁艶『清末民初における欧米小説の翻訳に関する研究 日本経由を視座として』九州大学大学院比較社会文化学府2013.1博士論文、4頁。状況を説明して「従来、中国の学界では翻訳小説は中国文学ではないという認識が強く残っている」

- 14) 以下の2本。

中村忠行著、訳者名不記「清末探偵小説史稿」晚清小説大系『黒蛇奇談』台湾・広雅出版有限公司1984.3所収

樽本照雄著、訳者名不記「《官場現形記》の真偽問題」晚清小説大系『官場現形記』下 台湾・広雅出版有限公司1984.3所収

- 15) 最近こんなことがあった。知らない中国人研究者から、『清末民初小説目録』(以下、樽目録。このばあいは第3版)に掲載される某作品の典拠は何か、とメールで問い合わせがある。この「補目」によって記述している、と該当ページを画像にして送った。すると、返答がある。その人いわく、「晩清小説大全」など見たことがない、と。それは当然だ。実現しなかった企画だからだ。さらにその人は、某作品について間違っている、実在しない、などと説明して長い。どうやら誤解している。私は、典拠を問われたので画像をそえて答えたにすぎない。それと某作品の真偽とは、問題が別である。また、それとは関係のない未発表論文が添付されている。参考資料をいただいたと受け取った。

- 『清末小説から』第109号 2013.4.1公開
いくたびかの阿英目録1 樽本照雄
Richard Marsh の中国語訳 渡辺浩司
張葆常的少年中国和廢漢語論 傅蘭雅
“時新小説” 征文參賽作者考(五)
..... 姚 達兌
《筆生花》初刊本小識 鄭 振偉

L. J. Beeston の中国語訳

渡辺浩司

1

Leonard John Beeston は、1874年生、1963年没、英国の作家で、1900 - 30年代に数多くの短篇作品を発表し活躍していた。拙稿「ピーストンの謎」及び「ピーストンの謎(補)」で取り上げた作家である。拙稿発表後、彼の未見の原作について、平山雄一先生と藤元直樹先生から、本誌樽本主編を通して、『Portcullis Square Mystery』は『Premier Magazine』11号(1915年3月)掲載、そして『A Clutch at a Straw』は同誌22号(1916年2月)掲載、であることを御教示いただいた。感謝申し上げます。御教示にもかかわらず、いまだに両原作とも未見で、翻訳との比較検討ができていないのは残念である。

両作品に限らず、中国語訳と推測した作品について、直接、原作と比較検討できないでいたことに不満であった。このたび、拙稿で言及していない Beeston 作品について原作及び中国語訳を見つけ、ようやく、両者を併せて読めたので本稿で報告する。

2

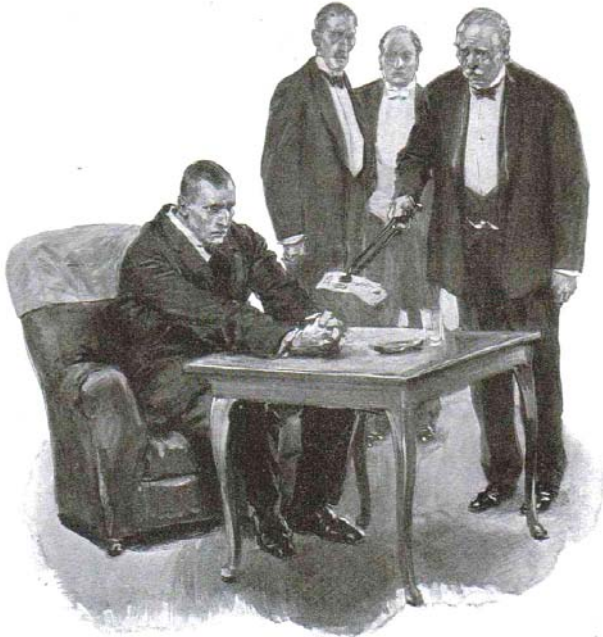
原作は L. J. Beeston 『From the Pit』、掲載誌は『The Strand Magazine』Vol.45-No.270(George Newnes,1913年6月)。中国語へは2度訳されており、第1は毅、笑《騙術奇談 懺悔》、《小説時報》第二十四期(有正書局,1914年12月15日)掲載。第2は冷風《五千鎊》、《小説月報》第七卷第四号(商務印書館,1916年4月25日 - 東豊書店1979年10月影印《小説月報 自創刊號起至廿二卷十二期止》)を使用、発行年月日は『清末民初小説目録 第4版』(樽本照雄編,2011年3月31日)による掲載*1。

訳者について、“毅”は張毅漢、原籍は広東新会、1895年生、1950年没、13歳から小説を発表し始め、共作も含めて約130の作品を残した。その大部分は翻訳小説という。“笑”は包公毅、原籍は江蘇呉県、1876年生、1973年没、創作・翻訳作品を数多く発表し、雑誌編集も行なっていた。拙稿「Bruno Lessing の中国語訳」で取り上げた《薔薇花》、《留聲機》も両者の共訳であった。“冷風”は未詳。なお、惲樹珏(原籍は江蘇常州、1878年生、1935年没)の筆名として“冷風”を挙げる辞典がある。それが“冷”を誤ったものならば、掲載誌《小説月報》の編集責任者でもあった惲樹珏の翻訳ということになる。

3

『From the Pit』のあらすじを紹介する。

I



"HE SCRAPED UP THE SLIP OF PAPER WITH THE FIRE IMPLEMENT, THEN HELD IT OUT TO HALLAS."

罪而我則甚欲盡地珠之一極自歸此身於一深淵之中也此兩年之生活誠可怖人今何如乎語氣俱不能完則以長呻完之此德至欠債時以火鉗鉗取地上之五千磅支票持至赫拉士前是時我目均注於此赫拉士攫取支票之成片片力揮於地比德曰噫此物誠污穢者幸我身尚携有未盡數之支票當如此數贈君此乃吾俱樂部中人所宜贈君君以一無辜之會友受此奇冤吾等不能為力心中至歡是乃吾等會友所宜賠償者後此爾等酒至復徐徐燃紙聲吸之言曰君等今當得極美之午餐信乎老將軍笑曰爾此來即因是語耶曰誠然

赫拉士手中
 (一)
 翌日麥茂勒老將軍與比德公爵對酌於蘇零之一大餐館中士丹特烈亦突如其來見二人在即移椅同坐坐命侍役更以

當如數分派償我可耳衆均高呼曰諾比德遂書支票而納之赫拉士手

L. J. Beeston 『From the Pit』

毅、笑《騙術奇談 懺悔》

Alfred St. John Hallas は出所後、Gower Street の貸間に行き、女主人の案内で Marchmont が借りてくれた部屋に入った。Marchmont は社会的地位があるので、女主人は Hallas を他の貸間人に対するように吟味することは無かった。室内の家具等は Hallas が使っていたもので、彼は Marchmont がとっておいてくれたのだと思った。彼は2年近くいた刑務所の生活を思い出し、癖になった独り言をつぶやいた。友も地位も失い、あるのはこの家財道具だけだった。ただ、彼は出所前日に手紙をくれて、ここに行くよう言ってくれた Marchmont だけが自分のことを忘れないでいてくれたと考えた。Marchmont のことと同時に、彼は Sabine クラブのことも思い出した。ウェストエンドで最高級の集まりだった。

しかし、彼はクラブに警察の介入をもたらしした。理由は単純で、彼がフランス人侯爵のコートから二千ポンド相当のペンダントを盗んだことだった。その時はたまたま侯爵がトランプで大きく負けていたので、もみ消すことが許されなかった。彼は逮捕され、有名なクラブ内での会員による泥棒ということで醜聞になった。その中でも、Marchmont だけは自分の無実を信じ、裁判でも応援してくれた。だが、彼は刑務所送りとなった。今、彼はあの華やかな街に出かけたい誘惑にかられていたが、昔の知り合いに会った時の気まずさを考え、煩悶していた。暖炉の棚に Marchmont からの葉巻があり、彼は1本吸い、一時の至福を得た。ドアをノックする音がし、女主人が手紙を運んできた。それは Marchmont の筆跡だ

った。彼は震える手で開封し読んでみた。内容は、激励等があり、そして明晩8時半に Sabine クラブへ来てくれ、重要な話がある、とあった。彼は驚き、女主人が階段の途中で足を止めてしまうほどの大きな笑い声を上げた。

II

8時すぎ、夕食を終えた Sabine クラブの会員たちは、喫煙室へ移動した。Marchmont の求めに応じてやって来た会員で部屋はいっぱいだった。8時15分になっても Marchmont は現れず、人々は噂し合っていた。彼が現れ、「諸君!」と話すと、室内は静かになった。給仕が去るのを待ち、彼は話し始めた。「異例のやり方で皆に集まってもらった」等と話すと、聴衆から「大声で!」と声がかかった。彼の顔は紅潮から土色に変わり、深呼吸をしたり等して、「邪魔せずに最後まで聞いてほしい」等と言った。そして「我々皆に関係し、忘れようとしている出来事について話す; Hallas が昨日出所した、彼に関して辛いがやるべきことがある」等と話した。Marchmont は後ろのドアを開け出て行った。彼は、うつむいたままの Hallas を連れて戻って来た。立ち上がろうとした数名を、彼は「全責任を取る」等と言い、押しとどめた。聴衆が静まると、彼は話を続け「このやり方は正当だ; Hallas は別人の犯罪の犠牲者なのだ、侯爵のペンダントを盗んだのはこの私だ」等と言った。室内はすべてが動きを止め、皆が話し手を凝視した。彼は後ずさりし、Hallas を放し、Hallas は放心状態で彼を見ていた。彼は

再び話を続け、Hallas 逮捕後の自分の心の苦しみ、犯行の経緯、犯行の背景にはある女性に関係していたこと等を話し、Hallas が潔白であることを強調した。更に、罪の償いとして用意した五千ポンドの小切手を取り出し、「足りなければ2倍3倍出す」等と言い、テーブルに置いた。突然 Hallas は彼につかみかかった。2人はつかみ合ったまま、転がってテーブルをひっくり返したりした。2人は引き離され、Hallas は怒りと興奮で震え、かろうじて立っていた。Marchmont は服をボロボロにされ、周囲を見て「殺されかけた」等とあえぎながら言った。会員の McMuller 将軍は Marchmont に「当然だ、速くここから出て行きなさい」等と言った。彼は「出て行くとも」等と言い、部屋を後にした。誰も止めなかった。Hallas は会員に支えられ椅子に座らされ、すすり泣きを始めた。周りの会員は「汚名はそそがれた」等と慰め、床に落ちていた小切手を彼に手渡した。彼はその紙片を細かく破った。会員たちは同情を示し、その中の Peter 卿は手持ちの白紙小切手を取り出し、周りの会員に「五千ポンドと記入し、同情と敬意の印に贈ろう」等と言った。

次の木曜、McMuller 将軍と Peter 卿がソーホー地区のレストランで食事していた。そこに、Standreth(Sabine クラブの会員)が不意に現れた。彼は2人のテーブルにつき、Marchmont も Hallas も国外に出たこと、その2人がパリにいるのを見られたこと等を話した。そして、2人が冗談を言いながら会食していたことを

話すと、將軍は酒瓶をひっくり返し、卿は瓶をテーブルにたたきつけた。Standreth は更に「結局、Hallas がペンダントを盗み、Marchmont が手伝った；露見し、Hallas だけが捕まった；出所後、Marchmont が囚って、クラブでのあの芝居となった；2人とも困窮しており、我々の五千ポンドが2人に折半されたのだろう」等と言い、最後に「このタバコを試して下さい、心を落ち着けるいい香りがします」と話した。

英国の club という特殊な世界での事件を描き、意表をつく最後にするという、Beeston 作品によく見られる物語展開である。Hallas が要求したわけではなく、他の会員たちが自主的にお金を渡しているので、たとえ2人を英国で見つけても、詐欺罪で告発することはできないであろう。現在から見ると、簡単に騙されすぎな気もする。

4

翻訳について述べる。2度訳されているなら、3度目も考えられ、その発見に役立つと思うので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

原作	《懺悔》	《五千鎊》
Hallas	赫拉士	哈喇
Marchmont	馬區孟	麥區孟
Sabine	索檳	薩平
McMuller	麥茂勒	麥默羅
Peter	比德	批拖

書名について。原作は文中に1か所見

える。

So here he was again, in London, come out from the pit.(621頁右)

(そして今、彼は再びロンドンにいた、奈落の底から出て来たのである)

文中の「from the pit」を、《懺悔》では“出獄”(2頁)、《五千鎊》では“脱却鬼趣”(2頁上)等と訳している。前者について、“出獄”は意味が限定されるので、皆の前での Marchmont の告白(芝居)から“懺悔”としたのであろう。後者は、そのまま“脱却鬼趣”を書名としても面白いと思うが、2人が巻き上げた金額から“五千鎊”と穏当に改めたのであろう。

4-1

内容について。先に発表された《懺悔》を取り上げる。原作は I、II に分かれているが、翻訳は(一)~(三)に分けている。(一)、(二)は原作と同じである。最後の詐欺が明らかになる場面で、原作では1行分空けるだけの個所を、(三)としている。最後は、原作のように日数の経過を示すために1行分空けるだけで、さりげなく付け加える感じが面白いので、やはり(三)として独立させない方がいいと思う。

文章は、細かな省略・加筆・改訳はあるものの、物語を変えずに訳している。ただ、大きな省略が2か所見られる。1つは、Hallas の裁判時に Marchmont が

支援し、彼の無実を信じていた等とする部分、1つは、Marchmont が犯行の経緯を詳述等する部分(624頁右-625頁右)である。前者は、クラブでの Marchmont の告白を盛り上げるために必要であり、後者は、その告白を皆に信じさせるために欠かせない、と思うのだが、共に不可解な省略である。前者を挙げる。

The walls were covered with his pictures; his folding card-table was in a recess; his bric-à-brac everywhere; his piano in a corner. Certainly Marchmont had acted in a kindly fashion.

Good old Marchmont, who, at the trial, had backed the accused with all the weight of his influence - which was not much. Clearly Marchmont had believed in his friend's innocence. No doubt he had insisted upon it at the Sabine. In vain. Over the brink Hallas had gone; shut out in a terrible darkness; got rid of by society; his name a thing for shudders.

A jail-bird; a felon; a professional thief. And a member of the Sabine Club. Horrible paradox!

He was seized by a desire to go out.(622頁左-右)

(壁は彼の絵で埋められ; 折りたたみ式のトランプ用テーブルは奥にあり; あちこちに骨董があり; 隅にはピアノが置かれていた。きっと Marchmont が親切に動いてくれたの

だろう。

善人の旧友 Marchmont は、裁判時は全勢力を費やして被告人を支援した - その力は十分ではなかったが。明らかに Marchmont は友人の無実を信じていた。間違いなく彼は Sabine クラブでそのことを主張した。無駄だった。崖っぷちを越えて Hallas は行ってしまった; 恐るべき暗闇に閉じ込められ; 社会から除外され; 彼の名を口にすることさえはばかられた。

囚人; 重罪人; 常習の泥棒。そして Sabine クラブの会員。ぞっとするような逆説!

彼は外に出たい欲求にかられた。)

其他則壁間畫片。與一可摺疊之門牌小桌。及室隅之披阿拿。凡此數物。皆由馬區孟爲之位置。滋可感激。又思至外間一游。藉以遣悶。(3頁,句点は本文のまま,以下同)

(その他のものといえば壁の絵、折りたたみ式のトランプ用テーブル、そして隅のピアノだった。これらすべては馬區孟が置いてくれたもので、改めて感謝の念を抱いた。更に憂さを晴らしにちょっと外出したいとも思った。)

もう1か所、括弧(「」)を奇妙に用いている個所を示す。Hallas が Marchmont からの手紙を読む場面である。

The sheet of paper was filled on both sides with writing. Encouragement, doubtless; exhortation to play the man, and so on. But when Hallas had read but two lines he stopped, amazed. These two lines ran: -

“ Be at the Sabine Club to-morrow evening at half-past eight. I have something to say of the greatest importance - ”

What form of insanity had gripped Marchmont? He - Hallas - invited to the club of all places on the wide earth!(622頁右)

(紙は両面が字で埋め尽くされていた。疑いなく激励；そして男らしく行動するようにとの熱心な勧め等だった。しかし、ある2行を読んだ時、彼は止まって驚いた。その2行とは： -

「明晩8時半に Sabine クラブへ来てくれ。非常に重要な話がある - 」

どんな狂気が Marchmont の心を捉えたのだろうか？彼は - Hallas を - 広い世界の様々な場所がある中であのクラブに招待した！)

箋之両面。書殆満。書中所言者。必爲忠告之言。顧赫拉士甫讀至兩行。即截然止。大露奇訝之色「此兩行之語曰」請於明晩八時半至索檳俱樂部。吾有要言奉告「下略」噫。馬區孟果何意。殆病狂耶。夫以赫拉士玷辱此俱樂部。致聲播全國。馬區孟乃欲其至彼。異哉。(4頁)

(便箋の両面はほぼ字で埋まっていた。書いてあることはきっと忠告の言葉であろう。しかし赫拉士はある2行まで読むと、さっと止まり、大変奇妙な表情を浮かべた「その2行の言葉とは」明晩8時半に索檳クラブへ来て下さい。申し上げたいことがあります「以下略」ああ、馬區孟は一体どういうつもりだ？気が狂ってしまったのだろうか？そもそも赫拉士がそのクラブを貶め、それが全国に知れ渡ったのである。馬區孟がその彼をクラブに呼んでいる。おかしなことだ。)

当然、手紙の内容を「 」で括るべきである。或いは原稿で正しかった表記を植字工が誤ったのかも知れない。校正は無かったのであろう。

4 - 2

次に《五千鎊》を取り上げる。くり返すが、原作は I、II に分かれている。しかし、こちらは章番号で分けず、改行のみである。そして、中身については、最後を大きく改め、省略している。翻訳の最後の部分とそれに当たる原作を挙げる。2人の取っ組み合いの後の場面である。

The members looked at one another. No need to exchange thoughts audibly, for each had the same. What a horrible scandal, this! The first had been bad enough; but the present development was

infinitely worse.

Hallas lifted a haggard face and perceived only kind eyes regarding him. He looked ashamed, and blurted: " A dashed fool - making this exhibition of myself - so sorry - "

" That's all right, " said Sir Peter, gently. " As right as rain. Don't you worry. "

" Has he gone? "

" Marchmont? Yes. "

" Ah! What ought I to do about it? " asked Hallas, wearily.

" Clear your name, first thing. "

" I seem to be dreaming. Marchmont did that? My soul! There was no finer fellow. The very last man in the world! I'd like to spare him, even now, for his sake and - and yours; but I should have to go away and bury myself in some dark hole at the other end of the world. Ah, those fearful years! And now - now - "

A groan ended the sentence.

General McMuller murmured to a sympathetic ear: " If this disgrace could only be got over - "

" Impossible. "

Sir Peter Breves went to the fireplace and took up the tongs. Every eye watched him curiously. He walked to where Marchmont's cheque had fluttered to the carpet, and he scraped up the slip of paper with the fire implement; then he held it out to

Hallas.

Amid a breathless silence the latter took the cheque for five thousand pounds and tore it across and across.

" As was only, " murmured Standreth, cryptically.

Sir Peter smiled grim approval. He stepped aside, motioning to others. He whispered to this group: " Fortunately, I always carry in my letter-case a blank cheque, for emergencies. This is an emergency. I suggest that I fill up a cheque for that other five thousand so properly treated as dirt. I think that possibly we may consider that we owe it to poor Hallas. We can afterwards make it up between ourselves. "

There were not wanting many murmurs of appreciative assent.

" Understand, I am not hinting at buying his silence. That would be preposterous. On the other hand, he might show an unusual mercy for Marchmont. Wildly improbable; but you heard what he said. At any rate, we will combine in this way to offer him a substantial token of profound sympathy and unshaken regard. " (627

頁左-右)

(会員たちはお互いに顔を見合わせた。各々が同じ思いだったので、それを声に出して交わす必要も無かった。何と恐ろしい醜聞なのだろう、これは! 最初から十分にひどかった

のに、今の状況は更に更に悪くなっている。

Hallas がやつれた顔を上げると、温かい目だけが自分を見ているのに気付いた。彼は恥ずかしく感じ、突然言った：「全くのバカだ - 自分でこんなことを披露してしまって - 申し訳ない - 」

「いいんだよ」Peter 卿はやさしく言った。「当然のことだ。心配するな。」

「奴は行ったのですか?」

「Marchmont か? ああ。」

「ああ! この件で私は何をすればいいのでしょうか?」Hallas はうんざりして尋ねた。

「汚名をそそぐこと、それが第一だ」

「まるで夢を見ているようだ。Marchmont がやった? ああ! あんなにいい仲間はいなかった。世界で一番の男だった。私は彼を許そうと思う、今は、彼のため、そして - そして皆のために。で、私はここを去って世界の片隅の暗い穴に自分を埋めてしまおう。ああ、辛い年月だった! また今 - 今も - 」

うめき声で話は終わった。

McMuller 将軍は同情しながら小声で言った：「この不名誉を乗り越えさせれば - 」

「不可能です。」

Peter Breves 卿は暖炉の所へ行き、トングを取り上げた。皆が好奇の目で彼を見た。彼は絨毯に落ちた

Marchmont の小切手の所まで歩き、火箸で紙片を拾い上げた;そして彼はそれを Hallas へ差し出した。

息もつかぬ間に、彼は五千ポンドの小切手を手にし何度も引き裂いた。

「そうするしかないな」Standreth はこっそりつぶやいた。

Peter 卿は賛意を不気味な笑顔で表した。彼は部屋の隅に進み、身振りでも他の会員を招いた。彼は周りに小声で話した：「幸いなことに、私はいつもレターケースの中に非常用の白紙の小切手を入れている。今は非常時だ。あのゴミとして扱われた五千の代わりに、この小切手に書き込もうと思う。我々からそれを気の毒な Hallas に渡すということを皆で考えていいと思う。我々は後でその額を回収すればいいだろう。」

感謝のこもった賛同のつぶやきが止むことはなかった。

「おわかりだろうが、私は彼の沈黙を買おうというのではない。それは馬鹿げたことだ。ただ一方で、彼は Marchmont に慈悲を示していた。全くありそうもないのだが、彼の言葉は皆にも聞こえただろう。とにかく、我々は全員でこういうやり方で心からの同情と確固たる敬意をきちんと形にして彼に贈ろうではないか。」)

室中人相視以目。蓋無可説。亦不必説。此惡劇愈出愈奇。有如夢幻。宜局中人之相諭於無言。久之。會長麥

默羅謂哈喇曰：“汝大可憐。彼麥區孟洵無理取鬧。”哈喇恨恨曰：“行乎。”批拖曰：“謂麥區孟乎。行矣。渠聲言不遠遁。今且奈何。”哈喇昂頭顧視。見衆友環己而立。目灼灼注視不移。赧然曰：“諸君試教我。此後當何作。”^{ママ}簽曰：“宜速洗刷名譽。計莫如以所受者施之。君其控於警署。不監禁麥區孟兩年者。非夫也。”伯爵向地毯上拾紙幣授之。微笑謂衆人曰：“无妄之災。何關名譽。若此五千鎊之鉅款。已無意中得之。他事可再商。此則取不傷廉者。”僉曰：“伯爵言然。”其明日。哈喇仍來俱樂部。如其未入獄時。麥區孟則不復有人見之。至若何關係女子名譽。哈喇終不肯言亦竟不控告。
(7頁下,コロソ・引用符は補った)

(室内の人間はお互いに顔を見合わせた。話すべきことが無いようで、また話す必要も無かった。このひどい芝居は進むほどに意外な展開を見せ、まるで夢幻のようであった。関係者のほとんどは無言のうちに理解していた。しばらくして、麥默羅会長は哈喇に「君は本当に気の毒だ。あの麥區孟は全くめちやくちやくに騒ぎを起こした。」哈喇は恨めしそうに「行ったのですか?」批拖は「麥區孟のことかね? 行ったよ。奴は逃げないと言ったが、さてこれからどうしたものか。」哈喇は頭を上げ、周りを見た。友人たちが自分を囲んで、目を輝かせじっと見つめているのがわかり、恥ずかしそうに言った

「皆さん、教えて下さい。これからどうすればいいのでしょうか?」皆は「速やかに名誉を回復すべきだ。やられた分はやり返した方がいい。警察に告訴して、麥區孟を2年間監獄送りにしなければ男ではない。」伯爵は絨毯から紙幣を拾い渡した。微笑んで周りに言った「不慮の災難だから、名誉と何の関わりがあるのか? この五千ポンドの大金もたまたま手に入ったものだ。その他のことはまた相談すればいい。これで清廉潔白を傷つけることもない。」皆は「伯爵の言う通りだ。」翌日、哈喇は刑務所に入る前と同様にクラブに来た。麥區孟については、それ以来彼を見かけた人はいなかった。女性の名誉とどんな関係があったのか、哈喇は最後まで話そうとせず、また結局、告訴することは無かった。)

中国語訳はこれで終わっている。Marchmont の告白が真実になってしまっているのである。細かい省略・加筆・改訳はあるものの、ここまでは物語を変えずに訳してきただけに、大変残念である。

5

原作『From the Pit』も、『Portcullis Square Mystery』と同様に、2度訳されていた。Beeston 作品の人気の高さを物語っているであろう。ただ、《五千鎊》の最後の改訳・省略はどうにも理解不能であった。好意的に解釈すれば、原稿で

は最後まで訳していたのだが、該誌印刷直前の段階で、編集者が既発表の《懺悔》に気付いた；差し換えも間に合わず、二重発表の批判を免れ、同じ作品ではないと主張するために、編集者が無理に最後を削除し、上述のような結末でごまかした、と考えられるかも知れない。

前掲拙稿「ピーストンの謎」でも触れたが、Beeston 作品の最初の日本語訳

『マイナスの夜光珠』(原題不明,西田政治訳)が掲載された『新青年』2-9(博文館)刊行が、1921年8月10日である。本稿の《懺悔》により、約6年8か月、中国語訳の方が早いことになり、また差が広がったわけである。

ここで L. J. Beeston 作品の民国初期における翻訳をその発表順に表にまとめる。

中国語訳	訳者	掲載誌	原作	掲載誌
懺悔	毅,笑	小説時報24 (1914.12.15)	From the Pit	Strand45-270(1913.6)
玫瑰刺	常覺, 小蝶	游戲雑誌12 (1915?)	Portcullis Square Mystery	Premier11(1915.3)
五千鎊	冷風	小説月報7-4 (1916.4.25)	From the Pit	Strand45-270(1913.6)
金錢魔力	天虚我生	小説大觀7 (1916.10)	A Clutch at a Straw	Premier22(1916.2)
雌魔影	常覺迷, 天虚我生	神州日報 1917.3.11-4.16	【不明】	
碧珠記	小青	小説月報8-6 (1917.6.25)	【不明】	
戲耳	茗狂	小説大觀10 (1917.6.30)	【不明】	
波譎雲詭録	小青, 君復	小説月報8-7~9 (1917.7.25~9.25)	Portcullis Square Mystery	Premier11(1915.3)
怨	毅漢	小説月報9-5 (1918.5.25)	【不明】	

* 《雌魔影》は『清末民初小説目録 第4版』C0697*による

徐々にではあるが、インターネット上で20世紀初頭の英文雑誌が読めるようになっていたので、本稿をきっかけに、原作探求だけでなく、Beeston 作品のより詳しい履歴の解明にも日が当たってほしいと思う。 罍

【注】

1) 『清末民初小説目録 第4版』は、《懺悔》(C0222)、《五千鎊》(W0873)共に創作と見なしている。また、W0873では訳者「冷風」を「冷風」に誤る。

【参考文献・ホームページ(HP)】

陳玉堂編著《中国近現代人物名号大辞典》

浙江古籍出版社,1993年5月

郭浩帆「張毅漢 - 一位被遺忘的小説家」,

『清末小説』26,清末小説研究会,

2003年12月1日

梁淑安主編《中国文学家大辞典 近代卷》

中華書局,1997年2月

William G. Contento 管理 HP「The Fiction
Mags Index」

<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2013年4月9日確認)

N・M卿管理 HP「ミステリー・推理小説データベース Aga-Search(アガ・サーチ)」

<http://www.aga-search.com/> (2013年4月9日確認)

渡辺浩司「ピーストンの謎」,『清末小説から』86,2007年7月1日 『清末民初翻譯短篇ミステリ論集』収

渡辺浩司「ピーストンの謎(補)」,『清末民初翻譯短篇ミステリ論集』収

渡辺浩司『清末民初翻譯短篇ミステリ論集』清末小説研究会,2010年5月1日

渡辺浩司「Bruno Lessing の中国語訳」,『清末小説』35終刊,清末小説研究会,2012年12月1日

(2013年4月9日提出)

江貴恩の《時新小説》和《鬼怨》

傅兰雅“时新小说”征文参赛作者考(六)

姚 达 兑

江貴恩撰《时新小说》参加了本次征文比赛,但未获奖。其参赛稿收入了《清末时新小说集》第十二册。¹据笔者所见有限材料而知,除参赛作品《时新小说》外,江貴恩还在《圣公会报》上撰有几篇短文和连载了一部中篇小说《鬼怨》。故下文从三方面展开:略考江貴恩生平;其著《时新小说》如何攻击三弊;简介其另一部小说《鬼怨》。

一、 生平略考

江貴恩(?-1944),原籍广东新安客家人,属于巴色会。1898年,移民马来西亚,转入圣公会。因与革命党人有联系,遂被驱逐出境。事过之后,他又回到马来西亚。旋又外派至广州圣保禄学院修道。1913年,在马来西亚被提升为教会执事。1915年,被按立为牧师,成为当地宗教领袖。1935

¹ 周欣平主编:《清末时新小说集》第十二册,上海:上海古籍出版社,2011年,页53-110。下文凡引原文,仅于引文后括号内注明,不另赘注。

年归国，转赴海南；1944年逝世于当地。

广东巴色会是十九世纪基督教新教传教事业最成功的代表。²巴色会源于瑞士属地巴色城。该城处于瑞士、法国和德国的交界处，故而会中以三国教士居多，而来华的巴色会又以德国人居多。在华的巴色会是以香港为基地，经深圳、东莞，再向广东其它客家地区传播。该会后来又称崇真会。

广东客家地区的巴色会，多是同姓同族聚居一处，其中以江氏、张氏两族为最大。两族皆曾出现了一些较著名的华人牧师和传教师，如江觉仁、江奇敏、江大贵、张复兴、张广鹏、张冲穆（音）、张中兴（音）等人。³傅兰雅征文比赛参赛作品之中，还有几位广东巴色会成员，如张志善和钟清源等人。江贵恩便属江氏一族的后人。

广东巴色会是较为本色化了的教会组织，成员多支持太平天国运动。在这批参赛作品作者中，有不少也同情或支持太平天国运动。如前面所论的朱正初，就曾任太平天国幕僚。又如张声和的父亲曾将被清兵追捕的洪仁玕匿藏于家中，后来又随洪氏赴天京。广东客家教民多属巴色会成员，支持或同情太平天国运动。故而在1860年后，太平天国覆灭后，巴色会教会及教士便作为中间人协助众多客家难民，一批批地移居海外各地。⁴尤其以东南亚为主要去向。

² Jessie G. Lutz and Rolland Ray Lutz, *Hakka Chinese Confront Protestant Christianity, 1850-1900, with the Autographies of Eight Hakka Christians, and Commentary*, New York: M. E. Sharpe, Inc, 1998, p. 3.

³ Ibid.

⁴ Ibid, pp.200-201.



Lilang Mission Station, 1880s (From Jakob Löcherer, *Die Basler Mission in China*, p. 19)

[广东巴色会李萌村据点，1880年间]⁵

江贵恩的参赛稿件首页署了来自于“广东巴色会李萌”。“李萌”，又称李朗，即是广东省深圳市龙岗区布吉镇的李朗村，至今仍有村名。江贵恩又自称是广东新安人。“新安”，后易名宝安县，又改为深圳市，“宝安”保留为一个区名。

江贵恩隶属于巴色会，族中亲友曾支持太平天国运动，故而江氏也主张推动改革，甚至支持反清运动。1895年，江贵恩参加了傅兰雅的小说征文比赛。1898年，江贵恩率领族众一百五十余人，集体移民马来西亚，如同摩西率领他的族人出埃及一样。移居马国的原因，除了对清国不满之外，一方面在于马国已有一定数量的客家人移民，在当地已有一定的基础和社会网络，另一方面在于当时的砂拉越地区（今属马来西亚）的白人“拉惹”（即国王）查尔士·布律克吁请更多的华人前去开垦荒地，并承诺了不少优待的条款。⁶

这批前来垦荒的华人，在马来西亚被称为“江归新人”或“惠东安人”。他们在

⁵ Ibid, p.27.

⁶ 房汉佳《惠东安人移居砂拉越的历史与现状》，载崔灿，刘合生主编：《客家与中原文化国际学术研讨会论文集》，郑州：中州古籍出版社，2003年，页416。

当地的后人记录如是，“这批客家人则习惯自称为东归新人，东是东莞县，归是归善县，现在称为惠阳县，新是新安县，即现在的宝安县，由于这三个县现已称为惠阳市、东莞市和宝安区，所以这三属人士就称为惠东安人，他们所创立的公会就称为惠东安公会。”⁷

这批移民马来西亚的广东巴色会教民，并没有将他们自己的教会带到马来西亚。他们犹如羊羔，失去了牧首。不久，在江贵恩的带领下，移民而来的全部巴色会教众，集体加入了英国圣公会。江氏自己也成为了砂拉越古晋圣公会传教师。当时砂拉越古晋圣公会的副总监阿瑟·沙普，后来在伦敦出版的书中记录道：“（江贵恩）他在上海美国圣公会学院华文翻译的教会教义帮助下，证明自己适合胜任圣公会教会传教师的工作。他传教的结果，使我们教会在不久之后，每逢星期日十一点，便坐满了华人妇女、婴孩和男人会众。他们中很多是从三英里或四英里外步行到来的。”⁸由此可见，江贵恩非常善于演讲，很受欢迎，在当地教会中也颇有声望。

这批“惠东安人”及其祖辈曾支持过太平天国运动，故而对清末的革命党人和革命活动有颇多的同情，一些教众也确实加入了革命组织。二十世纪初年，江贵恩、其它教士和教众，成立了一个华人报社“启明社”。“由于他（江贵恩）的推动，倾向孙中山的报社也一度于伦乐设立分社，

⁷ 房汉佳《惠东安人的移居与发展》，载《东莞乡情》，2002年第3期，页48。

⁸ 转自房汉佳《惠东安人的移居与发展》，页48。原文见 Arthur. F. Sharp: *The Wings of the Morning*, London: H. H. Greaves Ltd, 1953, pp. 71-73.

暗地展开反清革命活动。”⁹ 又，“1907至1908年间，海外革命势力利用启明社从事政治活动，甚至古晋圣公会传教士也认为，孙中山的革命活动对圣公会的传教事业非常有利。这期间蒙西主教还曾被邀来书店讲‘一个基督徒对中国革命的看法’。”¹⁰ 该社在号召教徒参与革命的同时，也号召了一批革命党加入了教会，成为教徒。不久，革命组织受到了当地统治者的查禁。虽然如此，“来自圣公会的江贵恩等人，仍然成功地感召到一些客家人和其它华人，他们既加入教会也参加革命。”¹¹ 也因此事，江贵恩一度被驱逐出境。后来经由公会的辩解和担保，才又重回砂拉越。

后来江贵恩被派遣至广州圣保禄学院（未确知地点）进修。他于1913年回到马来西亚，旋即晋升为执事。1918年5月26日，又晋升为牧师，成为当地的宗教领袖，是当地圣公会的卓越牧师和著名人士。¹² 1935年向教会告老归国，转赴海南岛，因为海南当时有原广东巴色会移民的客家族群。他到当地主持开辟垦场，直至逝世。

二、《时新小说》

江贵恩的参赛稿《时新小说》，一共三回，每回分别针对鸦片、时文和缠足三弊而展开叙述。故事是以第一人称“余”作为叙述者。很明显他即是江贵恩本人。故事的大概如是：某日，江贵恩经过邻村谭

⁹ 王琛发著：《马来西亚客家人的宗教信仰与实践》，马来西亚：客家公会联合会，2006年，页120。

¹⁰ 朱峰著：《基督教与海外华人的文化适应》，北京：中华书局，2009年，页177。

¹¹ 同上。

¹² 房汉佳《惠东安人移居砂拉越的历史与现状》，页409。

石市，见到市侧破屋中的贫民何阿难。何阿难是木工，好鸦片。其兄长何振邦是读书人，无奈不利科举，遂改业地舆。兄弟两人的妻子皆缠足。江贵恩遂与三者，独个辩解三弊之害，希望他们改良，并从“天道”（基督教）。

何阿难也称深知鸦片之大害，奈何不能控制自己。他说：“鸦片害人，余实知之，人人亦知之。如我乡有歌曰：‘劝男莫食鸦片烟，食烟容易戒烟难。’……‘明知死路行将去，有几生人跳出来。’”（页57）

江贵恩指出鸦片之害不仅在于个人，还背逆上帝。吸食者不仅“抱愧今日亲朋”、“抱愧古人”（因为古代圣贤饮食有节），而且还犯下两重大罪：“一在逆天，二在不孝。”（页61）。“逆天”是指背逆上帝。他解释道，“夫天上上帝生人，赋人以性，即赋人以形，全完无缺。故人必当守其身，而养其性，庶无负于苍天。奈何鸦片之来，败人身体，坏人心术，如人有七情。所以显性中所包藏者，今鸦片乃败人情，即可见人性之坏。”吸食鸦片不仅会毁坏人的身体，而且败坏人的性情、心术，故而是逆天，是背弃上帝的恩义。

何阿难承认了吸食鸦片犯下“逆天”之罪，但是仍然不明白为何又是“不孝”。“难曰：闻先生之言，实知获罪上帝，有不可逃之罚矣，然何谓鸦片害人不孝乎？”（页63）江贵恩解释说，“一肤一发，受之父母，务自珍如金玉。”并举例说先贤曾子善于守身，至死都不敢让身体发肤受到任何损伤。“因鸦片不第伤及一肤一发而止，更伤入肺腑，毒入骨髓，思之及此，于我何忍。吾将何以对父母哉。且不孝犹不止

此，乃有终日烟床，轻父母命。父母有诏，勿谓无诺，更不闻不行矣。故孟子在此，必以鸦片冠五不孝之首，惩戒后世。”（页64）。故而，不能侍候双亲，也是一罪。

江贵恩在论述鸦片使人“逆天”和“不孝”之时，丝毫没有提及两者可能存在的冲突。在新儒家那里，性情是来自超越性的“天”，而在这个故事里，这个超越性的天，被替予以“上帝”。所以表面上看来，两者在儒家理学的理论上并没有冲突。故而可以说鸦片之害，形而上一面是“逆天”，而世俗一面则是“不孝”。这是将基督教和儒教两者并列，引申作为道德训诫的标准。

江贵恩还指出，吸食鸦片无异于自戕，但是这种自戕之害，不仅在于一人一家，而且还会使国家贫穷、落后。吸食鸦片不仅伤害个人的身体，同时也使得吸食得变得越来越贫穷。“然贫穷有何干于重大？余曰：贫穷之害，小者一身一家，大者一国。”（页66）。这里采用了儒家伦理中的从个人到家庭到国家天下的推及原则。“奈何多少壮丁男，全无操作，空负光阴……我国吸食鸦片不下数百千万，共计一日所负光阴，数十年矣。国家所以贫者，实由此也。”（页66-67）

江贵恩最终给出了解救的药方：要拯救中国，必要先消灭鸦片流毒，而戒烟则可直接去西人开设的医院救医。“今西人惠我中国，广设医院，凡立志戒烟者，莫不喜而助之。购药亦价廉货实，又如《戒烟图说》，列明数款良方，皆可取用。”（页69）何阿难听罢喜形于色，但又提出还有精神上的困难：戒烟之难，难在立志。这

方面，当然便由基督教来补救。故而作者指出，“不难，人视为难，天视不难。今日天道自西徂东，助人立志，去旧更新。余目经数十人，立志戒烟，皆先训以天道。……如兄台有疑天道无是功力，请尝试之，始信吾言之不谬也。”（页69-70）所谓“天道”，即是自西徂东的基督教。至此，既医院治疗身体，又有基督教治疗精神，则鸦片当然是可以戒除去尽了。

江贵恩不忘展望全国戒除鸦片之后国家强盛的情况：“遍搜十八省之村间，既无卧烟塌，辜负光阴者矣。此时国之富强也，岂不可坐而待乎。故一除鸦片，即见家齐国治，即见国富兵强，岂不美哉！岂不美哉！”（页73）

小说第二回抨击时文之弊，以何振邦学文不成、潦倒一生的案例作为发难的始因。何振邦多次科考不中，改行做起了风水先生。这是迫于生计为稻粮谋，并不是真心相信舆地之学。江贵恩批评他不诚心敬意（不像真正的儒者）。既然自己不信，为何又要去骗人？同样的情况也如：读书人作时文也是不信，偏要去骗人害己。这是第一点批评：作者并不心诚。

第二点批评是八股范式是对写作者的束缚。何振邦也自道作时文颇受束缚。“古人作文，先求理正，后求言顺，断非如今日八股，吐血三升，始成一讲。”江贵恩也接口说作文不必如作时文那样必须要用古语，尽可以完全浅俗铺陈。所谓“观诸唐虞三代、孔孟诸书，辞达而已。”又“即后人著书立说，皆浅白句语，何以文为？不文而自文，大异今之强作文彩可观，终亦

坐而言、不可起而行者。”（页81-82）因而第三点是八股非取才之道，所获的人才也多属无用。

与论述鸦片有三大害的思路一样，江贵恩认为时文也有三大害，“一害于国政，二害于人才，三害于贫穷。”鸦片之害，可由《圣经》和西医解决，而时文之大害，则需要改进教育现状。因而，他在述说了时文诸多弊害后，解决的方案便在于要以新学堂取代科举，并让男女共同进学。

何振邦也同意时文应该革除，但他更关心：应以何物改造人心？正如立志戒烟可求助于“天道”一样，改造人心也应取法于“天道”——即基督教。何振邦进而问：“长于时文”的读书人“欲待进取”但却遇阻时，应当如何是处？江贵恩说：“必以天道先化人心，以天道始有去旧更新之力，除人好逸恶劳之性。如是天道，实为新学之本。天下列国，皆以之而兴，我国岂可舍之哉。”（页90）江贵恩所谈的“天道”并没有直接地换成基督教。而是巧妙地借用了一般民众容易接受的语汇。这种本色化策略可能较能说服读者。最后一点是他指出了天下（西方）列国之兴盛，乃是因为信崇“天道”（基督教），而中国之所以积弱受欺，则是因为未信基督教。

在第三回中，江贵恩指出缠足之害，主要是因为人心受到魔鬼控制。“因空中有昏神，即是魔鬼，使人皆向恶，昏然而习有害之事。俗云：食鸦片有烟鬼、赌博有赌鬼，今裹足亦有缠鬼，故今日虽人人适，不能去其害，鬼力故也。”（页100）这里江氏似乎援引了基督教的理念，将坏事都归

因于魔鬼，缠足便是因人心受到魔鬼的迷惑。

江贵恩批评三弊的思路也如前一样。吸食鸦片是“逆天”，立志戒烟，应借助天道。祛除时文一弊后，文人也应从天道。那么，批判缠足？“缠足大害，莫先于辱天，次莫大于不孝，三莫大于败身，四莫大于贫穷。”（页102）。这是缠足的四宗罪，竟然也与鸦片和时文的弊端非常相近。

江贵恩用了不少的篇幅来论证缠足的最大罪愆乃是“辱天”。缠足破坏人之身心，所以得罪于上帝，难免要受上帝惩罚。“夫人之身心，受之于天上上帝，全完无缺，若小足是全完，则怀胎生育，必成一小足，女子何必生之如男子足，岂天之不智乎？若今日小足为全完，则古女子如娥皇女英及孔孟之母，皆不裹足，则天有偏乎？皆非也。惟今日父母，强为造作，自拟与上帝并立，大辱于天。妄夺造化之权。嗟乎！我何人乎，何敢辱天。如天垂赫怒，亦难逃其刑矣。尝闻福自天来，则祸亦自天来。古书曰，‘作善百祥，作不善百殃’。孰敢谓天帝无灵，其所以不罚我者，慈而已矣。”（页102-103）此外，父母帮助幼女缠足，“忍视女子凄凉号泣，任彼痛苦……”，除了有碍天道、得罪上帝之外，还会陷女儿于不孝。这是因为女儿应当尽责地孝敬父母，但若是缠了小脚，恐怕就会因身体不便，无力去尽孝了。

如何破除缠足恶习，江贵恩给出的解答也是物质和精神双方面的，即可以去天足会，同时去“天道诸会”。他说，“今国中既立有天足会，劝人存其天然之足，入其会者，莫不欣然接之，助之去此流毒。

即传天道诸会，皆不裹足，有是志者，皆可入之。一则可救己灵，二则可救己身。”

（页106-107）其实“天足会”是女传教士所建立，与基督教传教组织有密切的关系。

早在1874年左右，一些女传教士便在上海发起了反缠足的活动，直接攻击了这种陋习，并挑战了这种陋习背后的父权制。1895年，Alicia Little（一个英国商人的妻子，本人也是传教士）在上海发起的“天足会”，可算是较具规模的反缠足组织，影响较大。¹³同一时期，广东也有与“天足会”性质相近的组织。1895年康有为、康广仁兄弟在广东成立了“粤中不缠足会”，康有为的两个女儿康同薇、康同璧也带头不缠足，对粤中风气影响甚大。江贵恩当然也熟知这些“天足会”运动。

综合言之，江贵恩攻击三弊和提出解弊的方针都是从物质和精神两方面进行。所谓“一由可救己灵，二则可救己身”。他的论述不仅针对了三弊对个人身体的危害，也关心个体灵魂的得救，有时也不忘抒发国家贫弱的忧思。

此书每一回回末，都回归到了“基督教腔调”，引申论述了“天道”（基督教）对于被除三弊、拯救中国的重要性。这种过分说教的论述，是此书的一大弊处。

三、《鬼怨》

江贵恩经常在《圣公会报》上发表文章，既有个人出差传教的报道，也有一些杂论（如《一个传道妇的工作》谈论女教士的

¹³ Kowk Pui-lan, *Chinese Women and Christianity, 1860-1927*, Atlanta, Georgia, Scholar Press, 1992, pp. 112-113.

职责)，还有一篇重要的中篇小说《鬼怨》。

1935-1936年，《鬼怨》分五期连载于《圣公会报》上。¹⁴发表该小说时，江贵恩已回大陆，身在海南（第一、二期仍署名“砂拉越江贵恩”，后面便不署地名）。他于1895年参加了小说征文比赛，四十年后仍有小说发表。这说明他可能一直坚持文学创作，或者至少对小说抱有强烈的兴趣。笔者所见材料皆来自中国大陆，非常有限，未能进一步作出总结。但是笔者推测，江贵恩可能同时是个文人，在移民马来西亚之后的近四十年间，应该还有不少作品在当地发表。

《鬼怨》是一部叙述技术较高的小说，有其独特处。故事设置在九月二十九日（是日为圣米迦勒节[Michaelmas]前夕。圣米迦勒是基督教神话中的“天使长”，在诸天使中辈分最高。他代表了光明，曾率领上帝的天使大军，打败了代表黑暗的魔鬼。

故事大意如是：圣诞节前夕，教堂在庆祝天使的胜利。在叙述者（我）独见远处有鬼火点点聚集，遂赶去察看。我来到了众鬼聚会的地方，偷听到五只鬼在抱怨加入魔鬼队伍后的惨状。五鬼刚叙述完，魔王便现身讲起他个人遭遇。以下全部篇幅皆由魔王第一人称叙述。魔鬼讲起这个节日的由来。原来是为了纪念当年圣米迦勒率领诸天使将他率领的魔鬼队伍打败。鬼王绘声绘色地讲起了当时神魔交战的场景（其叙述很容易让人联想到弥尔顿的《失乐园》）。魔王叙述完个人遭遇后，又引入了

其它的故事。他作了一番演讲，俨然如同一位宣教师在讲道，但是以魔王失望的口吻而作。最后是魔王感叹自己做鬼的惨状，并告诫诸鬼不要再做恶，宣布诸鬼散会。这又像是基督教宣教师灵魂附身作的宣道会。

“汝等老鬼、少鬼、男鬼、女鬼、贵鬼、贱鬼、旧鬼、新鬼，演言既终，宣告散会。祸是自由取，莫怨鬼无义。鬼身自难保，各当顾自己。……汝看东方微见白，我心先觉痛悽悽，莫钟待鸣叮嚀报，谁堪听唱杀魔诗，去留由己意，我先大步趋，散场最忌脚跟响，钓足群逃石洞栖。怕逢大殿群民会，一网打尽鬼无余。未日未临多时日，稍留汝命待时机。吁 吁 吁！”¹⁵这是魔王宣告散会的演讲词的最后一段，读来却如粤地戏剧班本的台词。

限于篇幅，更多讨论有待此稿合为单行本之时。

（中山大学中文系，yaodadui@gmail.com）

清末小説から

崔文東氏より資料の提供を受けました。感謝します。

韓嵩文MICHAEL GIBBS HILL 萍雲の狩獵旅行 王德威主編『中国現代小説の史与学：向夏志清先生致敬』台北・聯經出版事業股份有限公司2010

陳大康 中国近代小説史料 《繡像小説》中小説史料編年『文学遺産 網絡版』劉霞によると2010.4.5（未確認） 電字版

¹⁴ 江贵恩《鬼怨》，分五期连载于《圣公会报》1935,28 (20), pp. 24-25; 1935,28 (21), pp.19-22; 1935,28 (22), pp. 16-18; 1936,29 (7), pp. 17-21; 1936,29 (9), pp. 20-24.

¹⁵ 江贵恩《鬼怨》，载《圣公会报》(29) 9, 1936年，頁23。

- 陳 建華 論周瘦鵑“影戲小説” 早期歐美 字版
 電影的翻譯与文学文化新景觀, 1914-1922 『現代中文文学学報』10卷第2期 2011.12 電字版
 『中国現代文学研究叢刊』2013年第1期 (總第162期) 2013.1.15
- 張 治 林譯小説底本補考 『現代中文文学学報』2012年第6期(總21期) 電字版
 通俗文学入史与中国現代文学格局的思考湯 哲声
- 劉 霞 關於《文明小史》的刊行時間
 『現代語文』2012年第1期(總第454期) 2012.1.5
 比較文化視野中的歷史危機及其救贖
 魯迅早期的思想与文学翻譯..... 李 春
- 若杉邦子 清末中国における海の絵の受容をめぐって 『中国近現代文化研究』第14号 2013.3.31
 『明清小説研究』2013年第1期(總第107期) 2013発行月日不記
- 羅 曉静 『“個人”視野中的晚清至五四小説 論現代個人觀念与中国文学的現代轉型』北京・中国社会科学出版社2012.8 “文瀾學術文庫”系列叢書
 身份与文化的隱喻 試析清代小説的辯子
 書写周曉琳
 李伯元的定位及其他歐陽健
- 張 登林 『上海市民文化与現代通俗小説』上海文化出版社2012.11
 《中国通俗小説總目提要》“未見”条目之補遺陳大康
 吳趸人佚詩考釈何宏玲
 徐一士《小説漫話》考論劉 浩
 論清末民初小説中“英雄”形象嬗变的雙重維度魯 毅
- 祝 均宙 『図鑑百年文献 晚清民国年間画報源流特点探求』台湾・華藝學術出版社2012.11
 劉鶚与《老残遊記》: 個体啓蒙的一個例証王 韜
 『図鑑百年文献 晚清民国年間期刊源流特点探求』台湾・華藝學術出版社2012.12
 『図鑑百年文献 晚清民国年間小説源流特点探求』台湾・華藝學術出版社2013.1
 『清末小説』第35終刊号 2012.12.1
 ヘプバーン、マティーア兄弟と美華書館樽本照雄
- 張 衛晴 『翻譯小説与近代説論 《昕夕閑談》研究』北京・中国社会科学出版社2012.12
 Bruno Lessingの中国語訳渡辺浩司
 商務印書館『涵芬樓新書分類總目』について沢本郁馬
- 付 建舟 『清末民初小説版本経眼録二集』杭州・浙江工商大学出版社2013.1
 談《血淚黃花》郭 長海
 徐劍膽考論続篇胡 全章
 陳冷血兩篇翻譯小説の日本語底本..... 張 艶
- 樽本照雄 『清末民初小説目録 第5版』日本・清末小説研究会2013.4.15 電
 《盧梭魂》作者考辨宋 慶陽
 《劉鶚年譜長編》後記劉 德隆